

さらに東陽堂の印刷技術は、地図のみならず芸術の分野でも発揮されていきます。明治18年（1885）に結成された「東洋絵画会」は、明治維新後の急速な西洋化による日本画の衰退に危機を感じ、結成された「龍池会」（明治12年発足、のちに日本美術協会に改称）の流れに位置し、その機関紙であった『東洋絵画叢誌』（明治17年9月創刊）は日本美術雑誌の嚆矢であったとされています。東洋絵画会には時庭村出身（現長井市）の菅原白龍（1833-1898）らも参画し、また龍池会には、当時、海軍省に勤めていた米沢出身の下條桂谷も重要な役割を担っていました。さらには農商務省主催の内国絵画共進会の展示には、澤口静山や濱崎木麟等、米沢出身の画家の出品も数多くありました。

その東洋絵画会の機関紙『東洋絵画叢誌』が明治20年2月に『絵画叢誌』と改称、その出版も日本画の石版印刷に成功していた東陽堂が担います。東洋絵画事務所も東陽堂内に移し、東洋絵画会にも参画していた菅原白龍も第13号から編集人に名を連ね、寺崎広業（1866-1919）等の若手の日本画家にも挿絵の仕事を与え、『絵画叢誌』は大正6年（1917）、354号まで発行されました。

明治22年（1889）2月からは日本初のグラフィック誌として知られる『風俗画報』を刊行。古来からの風俗や年中行事、名所図会、勸業博覧会の模様等を挿絵つきで掲載し、後世に伝えることを出版の主旨としていました。刊行当初は振るわなかった売れ行きも「日清戦争図絵（征清図絵）」（第78号、明治27年）や「海嘯被害録」（第118－120号、明治29年）等の特集号や臨時増刊号で部数を伸ばし、大正5年（1916）まで518冊を刊行しました。

明治後期になると、新聞や雑誌誌面に写真媒体が使われ始め、次に紹介する博文館では、雑誌『太陽』や『太平洋』等で写真記事を多用し、売り上げを伸ばしていきます。吾妻は明治維新直後に、中央において西洋の技術を取り入れながら印刷業で身を立て、印刷業界や日本美術界の発展にも寄与しました。吾妻は大正元年（1912）10月26日に57歳の生涯を終えますが、東陽堂は大正12年（1923）の関東大震災で焼失するまでは開業していたとのこと です。

## 日本初の編集者 大橋乙羽

大橋乙羽は立町で旅館「音羽屋」を営んでいた、渡部治兵衛の六男として生まれました。本名は渡部又太郎といい、筆名の「乙羽」は、「音羽屋」からつけられたといいます。16歳の頃から友人と雑誌づくりに励み、明治21年（1888）7月に起きた会津磐梯山噴火の際に、噴火口まで取材をして「出羽新聞」（「山形新聞」の前身のひとつ）に記事を書きます。その記事を帰郷していた吾妻健三郎が読み、乙羽を自身の出版社「東陽堂」にスカウトします。

同年9月に乙羽は上京し、東陽堂の社員として『風俗画報』や『絵画叢誌』の出版にたずさわります。さらには尾崎紅葉や山田美妙らが発足した硯友社に参加、のちに「乙羽十種」と呼ばれた小説を多数発表しました。明治26年（1893）に博文館から「少年文学」シリーズに『上杉鷹山公』、翌年には「帝国文庫」シリーズに尾崎紅葉とともに『校訂西鶴全集』を刊行、その仕事ぶりが評価され、乙羽は大橋佐平の娘婿となり、博文館に勤務しはじめました。

博文館では編集者として、『文芸倶楽部』の編集を担当。また尾崎紅葉や巖谷小波らの硯友社同人をはじめとした作家を登用、さらに『文学界』で活躍していた樋口一葉に博文館発行の雑誌『太陽』、『文芸倶楽部』等に掲載する小説を依頼し、一葉が明治29年に24歳で早世するまで乙羽とその妻とき子との親交は続きました。

また乙羽は、岡倉天心（1863-1913、美術思想家）らと「文学美術家雑話会」（明治30年）を立ち上げますが、美術界からは橋本雅邦（1835-1908、日本画家）や川端玉章（1842-1913、日本画家）、高村光雲（1852-1934、彫刻家）が、文学界からは坪内逍遙（1859-1935）、尾崎紅葉（1868-1903）、徳富猪一郎（蘇峰、1863-1957）等が参加。文学者のみならず、

美術家や政治家とも交流があり、雑誌『太陽』等には乙羽が撮影した勝海舟（1823-1899）や伊藤博文（1841-1909）、大隈重信（1838-1922）等の錚々たる明治の偉人たちの写真が掲載されています。

明治33年（1900）3月2日、乙羽は念願であったヨーロッパ洋行のため横浜港を出発します。「パリ万国博覧会」や「パリ万国著作権会議」に出席し、半年かけてフランス、オランダ、ドイツ、オーストリアを回り、北米周りで帰路につきます。帰国後、旅行記『欧山米水』や週刊新聞『太平洋』等の原稿執筆に多忙を極め、その疲労もあってか、翌年の6月に乙羽は腸チフス等を併発し、32歳の若さで没しました。



『絵画叢書』



東陽堂の広告

死去前に、乙羽は葬儀は質素にすることと、財産は公益のために使うようにと妻とき子に言い残しています。その遺言どおり、興譲小学校に500円、東京盲啞学校等に100円が寄付されています。義兄であった大橋新太郎が当館に700冊以上の書籍を寄贈したのも、この関係だったのかも知れません。

## ルポライターとして

明治21年（1888）7月15日、磐梯山が噴火をし、小磐梯山は全面的に崩壊、大規模な岩屑なだれが起き、数ヶ村が壊滅しました。当時、日本は近代化を推し進めていた中で、この磐梯山噴火は初めて起こった自然災害でした。翌々日の17日には東京の中央紙でも報道され、また海外紙でも死亡者400人以上、負傷者1000人以上と、報じられました。またこの災害は写真でも噴火後の様子がお雇い外国人教師のW・K・バルトンらによって記録されました。

大橋乙羽は噴火が起こった時、体調を崩し白布高湯温泉の中屋旅館で静養をしていました。噴火の速報を聞くと友人と連れ立って、8月4日に出発、悪路の中、噴火口まで行き、翌日帰着、その時の様子を「出羽新聞」（「山形新聞」の前身の1つ）に詳細なルポルタージュを載せました。その記事を吾妻健三郎が見つke、乙羽を東陽堂に入社するように勤め、同年9月に乙羽は上京しました。当時、吾妻健三郎は『風俗画報』の出版を準備中で、乙羽は入社後、『風俗画報』や『絵画叢誌』の編集に携わりました。

大橋乙羽

明治29年（1896）6月15日に起きた「明治三陸地震」（震源 三陸沖）は、各地の震度はさほどでもなかったとのことでしたが、それに誘発された大津波、いわゆる「明治三陸大津波（大海嘯）」では、海拔38.2mを記録する大津波が発生し、死者2万人を超える甚大な被害が生じました。その時、乙羽は博文館に入社していましたが、大津波の一報を聞くやいなや、自ら写真機械を携えて、現地の惨状を撮影し、『太陽』第14号に掲載しました。さらに、義捐金を集めるために『文芸倶楽部』臨時増刊「海嘯義捐小説号」を出版、森鷗外や尾崎紅葉、幸田露伴らが寄稿し、依頼から1週間で70本余りの原稿が集まったそうです。

その臨時増刊号に乙羽は「火と水」を寄稿し、「十丈（約33m）の狂水、忽ち家と人とをを没し去りぬ。幸に生を獲たる者、願れば古柵の跡は、礎だも止めずなれり。」と被害の状況を記しています。その後も、吾妻は『風俗画報』で、乙羽は『太陽』や後に刊行したグラフィックタブロイド紙『太平洋』等で、自然災害のルポルタージュのみならず、内国勸業博覧会や日露戦争等の模様をいち早く掲載し、市民に情報を伝えようとしたました。

現地に乗り込み、写真機を携えて取材を行った乙羽、菅原白龍らとともに『風俗画報』等で日常生活から年中行事まで様々な風俗を版画（グラフィック）で伝えようとした吾妻、手法は異なれども近代日本のマスメディア発達期において、中央で活躍した米沢出身の2人の編集者。当館に残る資料から、その2人の軌跡が伝わってくるのではないのでしょうか。

大橋乙羽

大橋乙羽

大橋乙羽

<b>参考資料</b>	吾妻健三郎「発明苦心談」（『成功』第8巻第3号、成功雑誌社、1906年） <p>吾妻健三郎「実歴談」（『米沢有為会雑誌』、第165号、1906年）</p> 安藤貞之著『大橋乙羽―樋口一葉を世に出した男』、百年書房、2020年 <p>遠藤綺一郎著『吾妻健三郎伝』（よねざわ豆本 第75輯、よねざわ豆本の会、2005年）</p> 北原糸子著『磐梯山噴火―災異から災害の科学へ―』、吉川弘文館、1998年 <p>昭和女子大学近代文学研究室著『近代文学研究叢書』、第5巻、1957年</p> 高橋まゆみ「やまがた再発見 大橋乙羽 上・中・下」（『山形新聞』2012年5月6日号、13日号、20日号） <p>千葉正昭「米沢ゆかりの文人たち（一）―大橋乙羽素描―」（『米沢国語国文』、第44号、2015年）</p> 坪内祐三編『明治二十九年の大津波―復刻『文藝倶楽部』臨時増刊「海嘯義捐小説」号、毎日新聞社、2011年 坪谷善四郎編『博文館五十年史』、博文館、1937年 坪谷善四郎著『大橋佐平翁伝』、1974年 福島県立博物館ほか『共同企画展「会津磐梯山」展示解説図録』、2008年 広田三郎著『実業人傑伝』第4巻、実業人傑編輯所、1895-1898年） 松野良寅『美術印刷の先駆者 吾妻健三郎のことなど』（『明治の曙』、遠藤書店、1985年） 守谷兎喜雄『方寸千里―菅原白龍の生涯―」、「菅原白龍の生涯」刊行委員会、1986年 渡部乙羽稿「吾妻健三郎小伝（未完）」（『米沢有為会雑誌』、第40号、1893年） 「東陽堂主吾妻健三郎君実歴談」（『米沢有為会雑誌』、第164号、1906年）
-------------	---



『太陽』三陸大海嘯特集号